世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

エコプロダクツとしての着物：東京染小紋の事例研究

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-04-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大野, 貴子, 髙橋, 和枝
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/752

エコプロダクツとしての着物
－東京染小紋の事例研究－

Kimonos as eco products
Case study of “Tokyo Dyeing Komon”

大　野　貴　子*
OHNO, Takako

髙　橋　和　枝†
TAKAHASHI,Ichino Kazue

１．はじめに

日本の民族衣装ともいえる着物はサステナブルなファッションとして国内外から新たな評価を受けている。着物は体型や好みが変わっても仕立て直しや染め替えが可能であり、衣類としての寿命が尽きても、糸をほどき、布に戻した後、小物やバッグとしてリサイクルできる。さらに雑巾やオムツなどに活用した後に、はじめて廃棄することが、ごく自然に行われてきた。まさに「江戸時代のリサイクル」思想あるいは日本の「もったいない」文化を体現したエコプロダクツということができる。さらに着物に使用される布は、麻、綿の他、蚕から得られる糸を原料とする絹であり、いずれも再生可能資源である。また、長い歴史を経て、色柄の多様性や模様の緻密さ等から、芸術品としても評価が高い。

しかし、近年、着物を自ら購入し、生活に取り入れていくことには、いくつものハードルが生じている。「和装振興研究会～着物で日本の魅力を向上する～論点資料」の調査によると、「今まで着物を着なかった理由」として、「着付けができない」、「手入れが分からない」、「気軽に入れるお店がない」、「似合うシーンが分からない」といった意見があった。価格設定方法が不透明で、妥当性を疑問視する意見も多い［1］。さらに、製造者側にもいくつかの解決すべき課題があり、例えば、職人の高齢化や技術を伝承する若年労働者の減少等は、職場環境の悪化を招き、伝統工芸の継承を困難としている。このままでは、貴重な技術が絶えてしまう危険性さえある。

そのような状況の中、東京2020オリンピック・パラリンピックの公式オリジナル商品「ジャパンプレミアム」として「東京染小紋」の風呂敷クロスが採用されたことは画期的であった。「東京染小紋」は江戸時代の武士が着用した裃（かみしも）の柄に取り入れられて発展した日本固有の染物である。この風呂敷クロスは、上等な絹で作られており、肌触りが良いため、風呂敷だけでなく、テーブルクロス、スカーフ、ネックチーフとしても利用されることが期待できる。このように時代にあったニーズを見出すことができれば、新しい市場として発展する可

* 大学院環境マネジメント専攻　† 工学部教授（環境システム学科）

能性がまだあると考えられる。そこで、本研究では、着物のエコプロダクツとしての特徴を調査し、さらにその代表例として「東京染小紋」の着物の製造現場の調査を行った。その一方で、消費者へアンケートにより、着物に関する消費者行動および意識に関する調査を実施した。これらの調査結果を元に、「東京染小紋」を持続可能なものとするために解決すべき課題と目指すべき方向性を明らかにすることを本研究の目的とした。

２．着物の特徴

現在の着物のスタイルやライフサイクルは概ね江戸時代に確立されたものと考えられている。着物の構造は女性用の場合、着丈を腰の位置で折り畳んでお端折（はしょり）を作って裾を上げる。すなわち、着物は基本的にフリーサイズであり、洋服よりもカスタマイズが容易である。

着物の材料となる織物は反物（たんもの）とよばれ、通常、幅が 36cm の長方形の布であり、一人用で約 12 メートルが使用される。着物の構造の特徴は、左右対称であることである。部位は、衿、袖、身頃、衽（おくみ）に大別される（図 1）。着物の出来上がりの形は、みな同じである。このように、構造や作りが、単純であり、洋服のように生地を斜めに裁断するダーツを取る必要が無く、カーブの部位も無い。縫製は生地と同素材の縫い糸が使われ、ほぼ直線縫いだけで縫製されるため、補修や仕立て直しもしやすい。さらに、糸をほどくだけで、再度、長方形の生地に戻るため、様々な用途への作り替えが容易である。また最終的に廃棄する際、ボタンやファスナー等が無いため、金属等を分別する必要が無いこともメリットである［2］。

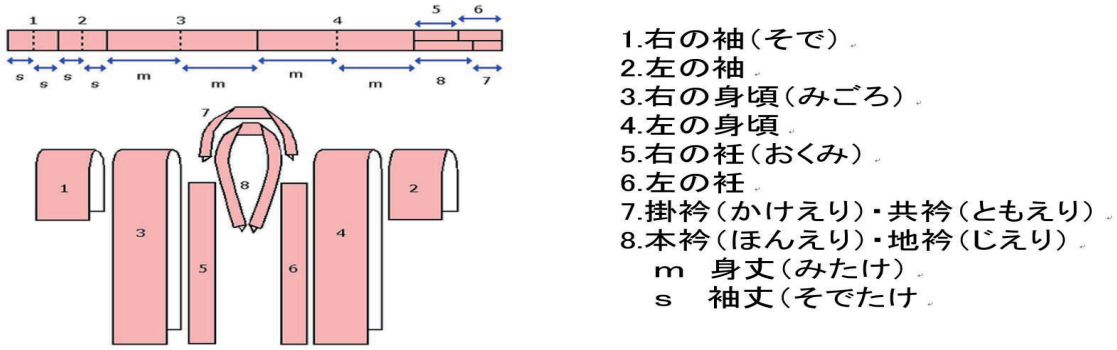

図 1．裁断の方法（裁ち方）

３．着物の流通とメンテナンス

３−１．着物の流通

江戸時代、江戸には 1000 軒以上の古着屋があったとされ、着物をはじめ、ほどいた布地や小さな裂（ハギレ）なども販売されていた。さらに店舗販売だけではなく、行商販売も盛んであ

った。一方、農村では自家製の麻や木綿の衣服を用いていたとされる［3］。

さらに、第二次世界大戦前頃までは、着物は普段着として着用されていたが、戦後、急激に洋装化が進み、日常着としての着物の需要は減少する一方で、戦前には富裕層しか購入することのなかった「ハレ」の絹着物である振袖、留袖等のフォーマルあるいはセミフォーマルな「染め着物」の需要が激増した。

着物の出荷金額のピーク（昭和 50 年頃といわれている）は 1.8 兆円規模といわれたが、2013 年には 3,000 億円規模（ピーク時の 1/6）まで減少している［4、5］。その後、呉服市場の規模は急激に縮小した。消費者の需要が激減したことにより、卸業は「飽和」状態となったため、生産者の減少を招くことになった。これに対し、様々な要因分析がなされているが、呉服業界の課題として消費の変化、取引条件の変化、信用の変化の 3 点が指摘されている[6]。

3－2．着物のメンテナンス

江戸時代、庶民にとって布は非常に貴重品であったため、布の擦り切れに対しては、「刺子（さしこ）」による修繕が行われた。一部の「刺子」は、美術品としての価値が認められ、伝統技術として受け継がれている。一般的なメンテナンス方法としては、「継ぎはぎ」の他、裏地や襦袢・腰巻・子供用への「仕立て直し」がある。さらにグレードを下げた夜着（よぎ）や風呂敷、おしめ・雑巾にもリサイクルされる一方、布を裂いて再び布に織り上げる「裂織（さきおり）」も行われた。最終的には焼却処分されるが、その灰も「洗剤」として掃除や洗濯に用いられた[3]。

江戸時代の着物の洗濯は主に米のとぎ汁やかまどの灰を水で溶かした灰汁（あく）が洗剤として使用され、ひどく汚れた場合は縫い目をほどいてパーツに分けて洗う「解き洗い」も行われた。特に絹織物は貴重品であったため、パーツ洗いの後、反物の形に端縫（はぬ）いされ、伸子（しんし）という竹ひごの両端に短い針が付いた治具を用いた糊付けが行われた。木綿の着物の場合は、洗った後、糊をつけて専用の張り板か雨戸に張って乾かす「洗い張り」が実施された[7]。

現在、着物のメンテナンスや洗濯は、専門の店に任せることが多いが、自宅で洗濯ができる着物も増えてきた。また、不要となった着物は、知人に譲る他、専門の古着商等に引き取ってもらう場合が多い。古着商等では、着物として再販するほか、小物等への利活用も行われている。

4．「東京染小紋」の歴史と特徴

4－1．「東京染小紋」の歴史

「小紋」とは、一面に細かい文様を散らしたものという意味であり、それを型染したものも同様に「小紋」と呼ばれる。鎌倉時代の直垂（ひたたれ：男性用の礼服）の中で、簡素なものが室町時代に素襖（すおう）と呼ばれたが、小紋の着物は、この素襖として発達し、肩衣袴（かたぎぬばかま）に継承された。江戸時代に肩衣袴は裃（かみしも）と呼ばれ、小紋の着物はこの裃の素材として不可欠であった。さらに 17 世紀の半ば過ぎには、町人文化が発展し、小紋の

着物は女性にも広まり、その文様はさらに多彩となった。一方、将軍や大名らが着用する着物は、独自の紋柄が決まっており、留柄（とめがら）や定小紋（さだめこもん）等と呼ばれた[8]。江戸幕府があった東京には各藩の武家屋敷もあったため、特に小紋の文様が数多く考案された。

明治以降は、西洋化が進み、洋装が広く浸透したが、小紋柄に草花の模様を描いた訪問着等の着物も一般市民の間に広まった［9]。東京の染めもの業は、江戸時代、水の豊富な神田川流域で始まったが、明治・大正時代になると、業者は、良質な水を求めて神田川を遡り、江戸川橋、早稲田、戸塚周辺から高田馬場にかけたエリアに広がり、現在の染め屋の集散地が形成された［10]。「東京染小紋」の生産者が集まる東京都染色工業協同組合は、小紋会と浸染会の二部門からなる団体である。小紋会が主に型染を浸染会が無地染めをそれぞれ担っているが、小紋会に属する工房14のうち、5つが新宿区に存在している。

４−２．「東京染小紋」の特徴

小紋の文様には様々のものがあるが、例えば、細かく白い点が縦横整列した「行儀霰（ぎょうぎあられ)」や半円形に文様が連続した「極鮫(ごくざめ)」の場合、3㎝×3㎝の正方形の中に800〜1000粒もの型が染められている生地もあり、これを手作業で製造するためには、高度な技術が必須である［11］。

武家の服飾から発展した着物である「東京染小紋」は、フォーマルな場所に着用ができる準礼装として扱われているが、帯等でアレンジをして、カジュアルな場所まで幅広く着ることができることが特徴である［12]。

「東京染小紋」は経済産業大臣が指定する「伝統的工芸品」である。また、平成18年度に導入された地域産業活性化のための「地域団体商標登録制度」にて、東京の地域ブランドとしても登録されている。現在、「東京染小紋」の高度な技術を活かして、マフラー、ランプシェード等の新しい製品開発が行われている。そのような活動の結果、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの記念商品「東京2020オリンピックエンブレム東京染小紋風呂敷クロス」が採用された。また、「東京染小紋」の製造は、長い間、男性が中心であったが、近年、女性伝統工芸士が誕生し、自らのブランドを持つといった新しい動きも現れ始めている［13]。

５．「東京染小紋」の作製方法

「東京染小紋」の作製方法は、文献および板橋区にある工房を見学して調査した。

5-1　材料

「染め」は生地に織り上げた後に染色し、布に模様を描く工程である。技法としては、友禅に代表されるでんぷん質（米製）の防染剤を用いる手書きの染色技法や、布の一部を縛るなどの方法で圧力をかけ染料が染み込まないようにすることで模様を作り出す絞り染め（しぼりぞめ）などがあるが、「東京染小紋」は、「型染め」技法を用いる。「型染め」に使用される材料は、柿渋を塗った和紙を貼り合わせ、柄を掘って作製した「伊勢型紙」および染料である。染料に

は、以前は、天然の染料が使用されていたが、現在では、化学薬品を調合した染料が主に使用されている。白生地には、京都府北部の丹後地方で生産される高級絹織物の「丹後ちりめん」が使われている。

5-2　道具［14］

主に使用する道具を以下に示す。

(1)　型紙

３枚の美濃和紙を、柿渋を使って重ね合わせたものが１枚の地紙となり、地紙を彫刻刀で切りぬき、美しい絵や柄を表現したもの。その多くは、伊勢（現在の三重県）で作られている。

(2)　彫刻刀

彫る柄によって彫り方だけではなく、彫刻刀が異なる。

(3)　板

長さ７メートルの樅（もみ）の木の１枚板。この上で糊を塗る作業を行う。

(4)　ヘラ

立描（たてがき）ヘラはシゴキヘラと呼ばれ、色糊を全体に平均に塗り付ける時に使用される。大駒（おおこま）ヘラは主に使用されるヘラである。出刃（でば）ヘラは細かい文様など糊を均等に使用する。

(5)　その他

地張木は生地を板にのばす時に使用する。

刷毛は色ボカシ等に使用する。

テープは布の固定に使用する。

5-3　工程

(1)　型紙作製

３枚の和紙に柿渋を塗って重ね合わせて作ったものが地紙１枚になる。 地紙８枚～10 枚を重ねて長さ 13cm、幅 40cm とし、彫刻刀を使って彫られた型彫りの模様が、小紋といわれる柄を作り出す（図 2)。

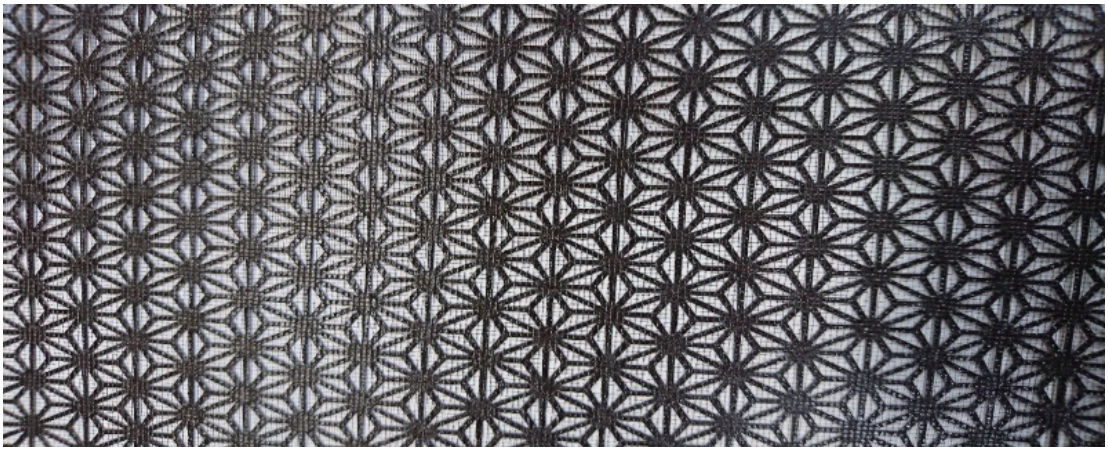

図 2．型紙

(2) 型紙を使った染色

① 色の調整：米ぬか・もち粉・塩をまぜて「もと糊」を作る。これに、「染料」をまぜると「色糊」となる。

② 型つけ　：捺染（なっせん）とよばれる。長い板に白生地を張り、その上に型紙を載せ、ヘラで型つけ糊を置いていく。この糊は、防染（染料で染まらない）の働きをする。

③ 板干し：型つけした生地を、はり板のまま天日で干し、糊を乾かす。

④ 地色染め：①で調合した色糊を、大きなヘラで生地全体に塗りつける。これを「しごき」ともいう。

⑤ 蒸し：生地を蒸し箱（図 3）に入れ、90℃～100℃で 15～30 分くらい蒸し、染料を定着させる。

⑥ 水元（みずもと）：蒸し上がった生地の糊や余分な染料を洗い落とす。「水洗（あら）い」ともよばれる（図 4)。

⑦ 湯のし（ゆのし）：水洗いされた生地を乾かした後、蒸気に当てて生地の幅（縮みや伸び）を調節する。

⑧ 仕上げ・地直し：最後に全体を見て染めムラ（染まり方のばらつき）などを直して完成する。

図３．蒸し箱

図４．水元

６．アンケートから見た着物と「東京染小紋」

６－１．アンケートの目的

アンケートの目的は、着物に関する消費者行動および意識を明らかとし、新たなニーズを掘り起こすことである。そこで、まず、浴衣以外の着物を所有しているユーザーに、所有している着物の種類、着用する頻度や場所、入手方法からメンテナンス、廃棄に至る行動を質問した。次に「「東京染小紋」の認知度や新商品の要望、応用アイデアについて質問した。

６－２．アンケートの実施要領

【調査方法】　インターネット調査

【調査時期】　2017 月 7 月 30 日～8 月 29 日

【回答者数】　89 名（着物の処分や手入れ、「東京染小紋」の所有については、有効回答数 86 件）

【回答条件】　浴衣以外の着物を一枚以上所有していること。

【回答者属性】

回答性別：　女性 82 名、男性 7 名。

回答者年代：　10 代 1 人、20 代 10 人、30 代 10 人、40 代 28 人、50 代 32 人、60 代以上 8 人

回答者出身：　多い順に東京都、神奈川県、大阪府、千葉県、兵庫県となり、都心出身者が上位を占めた。

６－３．アンケートの結果と考察

６－３―１　種類と用途

所有している着物の素材は「絹」が一番多く、「綿・麻」（カジュアル着物用）、ポリエステルなどの「化繊」と続いた。さらに１ユーザーあたり、絹、綿・麻、化繊の全種類の着物を所持しているとした回答者が一番多く、目的や天候、例えば、雨天の日には化繊の着物を着用するといったように臨機応変に使い分けていることが推察された。

着物を着る機会は、結婚式などの式典が一番多く、観劇、普段に着用とパーティが同程度、お茶などの和事の習い事等が続いた。これは、フォーマル用の着物に多い絹の着物を所有する割合が多いこととも合致する。ただし、ポリエステルの着物のみ所有と回答した３名の着物を着る機会に関する回答が、結婚式、観劇、パーティ（各１名）であったことから、化繊の着物も品質が向上し、デザインも多様になり、絹＝フォーマルとは一概には言えない状況になりつつあるということが推測された。

６－３―２　頻度、入手方法

着物を着る頻度は「月に数回（5回以内）」が一番多く、「年に数回（5回以内）」、「ほとんど着ない」、「数年に１回着用」が続き、「ほとんど毎日着る」という回答も最下位ではあるが数件あった。集計の結果、着物を所有している人のうち、約70％の人が年に数回以上着物を着用していることが明らかになった。さらに、17.5％が「普段」に着物を着ると回答しており、着物を着る機会は意外と多いことがわかった。

着物の入手方法については多い順に「自分で購入」、「母親・祖母などからもらった」が同程度、「親や祖父母等に買ってもらった」、「人からもらった」が続いた。集計の結果、購入（親もしくは自分で）が約80％を占めることがわかった。

６－３―３　着物の入手先と処理

着物の入手先については、「呉服店・着物専門店」が一番多く、次いで「リサイクルショップ」、「デパート」、「産地で直接購入」となった。デパートや呉服店といった店舗には着物専門の販売員がおり、その意見を参考に選ぶ人が多い。一方、リサイクルショップ等で、比較的安価なものを自分の好みで気楽に選びたいという人も増えていることが推察された。

着なくなった着物の処理は、「そのまま持っておく」、「人にあげる」、「別のものに作り替える」、「古着屋に売る」、「捨てる」の順となり、何らかの形で着なくなった着物をリサイクルするという回答が95.5％となった。アンケートの結果からも着物はサティスナブルな衣料であることが明らかである。また、着物をリサイクルで入手することも、逆にリサイクルに出すことに抵抗感は小さくなっていると考えられる。

６－３―４　着物の手入の方法、洗濯回数

着物の手入れ方法に関する回答は「着物専門店」が最も多く、「クリーニング店」、「家庭での

手洗い」、「消臭や除菌スプレー」の順で少なくなり、「家庭の洗濯機で洗う」は最下位であった。また、「家庭の洗濯機で洗う」ことは、化繊（ポリエステル）の着物に限られる行動であった。

洗濯回数は、多いものから「２～３年に１回」、「シーズンごと（年２回）」、「着る度」、「洗濯しない」、「１年に１回」の順となった。「洗濯しない」と回答した９人の中には、「月に数回（5回以内）着物を着る」が３人、「年に数回（5回以内）着物を着る」が２人おり、着物を着る頻度が多い人が必ずしも洗濯を行う回数が多くはないこともわかった。洗濯回数が少ない理由として、着物は肌着を付け襦袢を身に着けた上に着用するため、直接肌に触れることがないことや、冬場だけではなく、夏場でも塵よけの羽織をまとうことが可能であることが、理由として考えられる。

６－３―５　「東京染小紋」の認知度と購入

着物の有無を問わず、アンケートに回答した人の約 70%が「東京染小紋」を知っていると回答した。さらに、着物を持っていると回答したうちで「東京染小紋」を所有している人は約 20%であった。

「東京染小紋」の着物を購入した理由は、多い順に「柄や色が好み」、「着られる場面多い」、「値段が納得できる」、「帯合せの応用が広い」、「知名度がある」となった。また「歴史的成り立ちも好き」という意見もあった。一方、「東京染小紋」の着物を購入しない理由としては、「値段が高い」以外に、「色や柄が好きでない」、「他の着物と比べて地味である」、「『東京染小紋』でないといけないということがないから」等の意見があった。

６－３－６「東京染小紋」の着物以外の商品

着物以外の「東京染小紋」の商品の要望としては、「傘（日傘含む）」が一番多く、「バッグやポーチなどの持ち歩く雑貨」、「スカーフなど」の装身具が続いた。集計の結果、装身具への要望が約 80%を占め、インテリアグッズへの要望を大きく上回った。一方、「ネクタイ・ポケットチーフなど」の男性装身具への要望は少なかったが、回答者の 92%が女性であったことが理由とも考えられる。さらに、インテリアグッズへの要望は少なかった理由としては、「東京染小紋」の着物としてのイメージが強く、インテリア製品として利用された場合のイメージが持ちにくかったのではないかと推察される。その他、財布やバッグ、風呂敷といった既存の製品の他、違素材に印刷することで、洋服、文房具、水筒入れの他、染められた布の切り売り等のアイディアも寄せられた。

7.「東京染小紋」の新しい可能性

「東京染小紋」を持続可能にするため、時代にあった新たなアプローチが必要と考えられる。製造工程の調査、アンケート調査の結果から、新たなアプローチ方法を提案する。

（１）着付けの容易化

着物を着用しない理由として挙げられた「着付けの難しさ」に対しては、着物を二部式にする方法が提案されている［17］。二部式とは、上着とスカートのように上下に分けることで、着付けの時間が５分で済むと推定されている。さらに帯も切らずに付け帯にする方法もあり、これらの工夫により、着付けのハードルを下げることで、需要が増えることが期待できる。

（２）新商品の開発

既に「東京染小紋」による日傘［15］、小紋チーフ、がまぐち等、着物以外の商品が販売されており、伝統的な染小紋の技術を使いながら、現代的なモチーフにアレンジしている。さらに、異材料への染色技術が開発されれば、製品展開はさらに加速できる可能性がある。

（３）新素材としての活用

「東京染小紋」と同じく伝統的工芸品に指定されている西陣織がインテリア素材としてホテルの最高級客室の内装に採用された例がある。また西陣織を織り込んだ金銀箔がセンサーとなり、手を触れると音が鳴るというスピーカーがパナソニックにより試作された［16］。「東京染小紋」においても衣類だけではなく、付加的な機能を持つ新素材として技術開発が進めば、新たな需要喚起が期待できる。

（４）材料・道具への新技術投入

型染に必要な「伊勢型紙」は 1985 年頃に職人がいなくなったため、現存する型紙がなくなった時点で、枠型で代用することが検討されている。しかし、この枠型を使用することによって、完成品の品質・生産工程における伝統的工芸品の指定要件を満たさなくなる恐れがある［17］。しかしこれは、必要な代替不可欠な措置であり、伝統工芸品の継承を第一の目的とするためには、指定要件を見直す必要があると考える。

技術的には、レーザー加工による繊細な和柄文様の透し彫りを特徴とした新しい千代紙が製造されている［18］。そこで、「東京染小紋」においても「伊勢型紙」にこのレーザー加工の技術が適用できれば、小紋を存続させることが可能と考えられる。

図５．レーザー加工千代紙

8. まとめ

着物はその仕立ての特徴や江戸時代からのリサイクルの状況からエコプロダクツ商品といえる。しかし、現在、洋服が普段着となり、着物は「特別な服」になってしまった。また、市場の縮小と同時に、職人の高齢化や技能伝承の担い手の減少など、着物文化の継承に関わる環境は厳しい。一方で、今回実施したアンケートの結果により、また、着物の購入ルートとして30%の回答者がリサイクルショップで購入し、また、不在となった着物を捨てないという回答者がおよそ96%を占めており、洋服以上に着物はリサイクルによる長寿命化が期待できることが明らかになった。

新たな製品についてもまだまだ開発の余地はあり、身に着けていたい布としての魅力とポテンシャルを活用することは可能である。

これまで、技術革新があまり進まなかった伝統的工芸品であるが、新たな技術の開発により、「伊勢型紙」等の継承者不足を補うことが期待できる。また、新たな機能を持つ素材としての開発も可能であると考えられる。

さらに社会的要因として、近年、「和もの」に興味をもつ若い世代が増えつつあることが挙げられる。花火大会に浴衣を着る若者や、歌舞伎に着物で観劇する若年層も現れていることが傍証である。

今回の調査結果から、「東京染小紋」の着物はサティスナブルなファッションとして期待できることを明らかにすることができた。今後は、新たに提案したアイディアの具体化、さらに効果の定量化が課題であると考えている。

謝辞

「東京染小紋」の現場調査にご協力いただいた小林染芸の小林福司様に深く感謝いたします。

参考文献

[1]経済産業省繊維課、和装振興研究会～きもので日本の魅力を向上する～論点資料、2015年
http://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/seizou/wasou_shinkou/pdf/001_03_00.pdf
（2017/10/07）
[2]ウイキペディア、長着、
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E7%9D%80（2017/10/07）
[3]丸山伸彦、江戸のきものと衣生活、小学館、2007年　103頁
[4]和装振興研究会、和装振興研究会報告書、経済産業省、2015年
http://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/seizou/wasou_shinkou/pdf/report01_01_00.pdf
（2017/10/07）
[5]丸山伸彦、江戸のきものと衣生活、小学館、2007年　97頁

[6]石崎　功、きものビジネスの明日
http://kimono-kdc.cocolog-nifty.com/blog/2010/02/post-948f.html（2017/09/30）
[7]丸山伸彦、江戸のきものと衣生活、小学館、2007 年　109 頁
[8]丸山伸彦、江戸のきものと衣生活、小学館、2007 年　30 頁
[9]ニッポンのワザドットコム編集部、職人という生き方江戸小紋、2011 年　30 頁
[10]東京染色工業協同組合、http://www.tokyo-senshoku.com/（2017/10/15）
[11]江戸小紋廣瀬染工場、
http://www.komonhirose.co.jp/room/AboutEdoKomonPatterns.html（2017/10/15）
[12]おあつらえ江戸小紋　染一会（そめいちえ）
http://www.someichie.jp/hpgen/HPB/entries/110.html（2017/10/15）
[13]ニッポンのワザドットコム編集部、職人という生き方江戸小紋、2011 年
[14]板橋区教育ネットワーク、板橋区の伝とう工芸へ　東京染小紋
http://www.ita.ed.jp/edu/shakai/tokyo_itabashi/our_tokyo/komon/komon_top.htm
（2017/10/28）
[15]藤巻百貨店ホームページ　http://fujimaki-select.com/（2017/10/22）
[16]日本経済新聞　　京の技、温故「革」新　西陣織でスピーカーも
https://www.nikkei.com/article/DGXMZO21781430S7A001C1966M00/?n_cid=NMAIL005
（2017/10/22）
[17]一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会、伝統的工芸品生産基盤ネットワークデータベース
http://www.kougei-net.jp/genzairyou.php?SNO=32&kougeihin_id=47&Q2_1=%B8%A8%BB%E5&Q2_1_original=%B8%A8
（2017/10/16）
[18] IRORIO　https://irorio.jp/kaseisana/20170311/389871/（2017/10/22）